

整理記者の特ダネ ロッキード事件

■新編集講座 ウェブ版 第110号 2018/10/15

毎日新聞社 技術本部長（元・大阪本社編集制作センター室長） 三宅 直人

「スクープ」と聞くと、取材記者の活躍が目には浮かびますが、紙面を編集する整理記者(※)にも「特ダネ」があります。10月16日に仙台で新聞大会が開かれ、新聞協会賞が授与される(本社もキャンペーン報道「旧優生保護法を問う」で受賞します)のを機に、「整理記者の特ダネ」を紹介することにしました。ロッキード事件の際の中日新聞の紙面扱いです。※ 新聞紙面を作る「編集制作センター」は、かつて「整理部」と呼ばれていました。このため編集者を整理記者と呼ぶことがあります。

■ 午前1時、飛び込んだ一報

1976年2月5日未明、朝刊最終版の作業も終わろうとしていた午前1時すぎ、ワシントン発の15行ほどの原稿が各社に配信された。UPI電で「米上院外交委員会多国籍企業分科委員会は4日、ロッキード航空機会社の贈賄事件に関する公聴会を始めたが、同分科委が公表した資料によると、日本の右翼の大物である児玉誉士夫氏は同社から数百万ドルを受け取り、トライスタージェット旅客機の購入に当たって日本政府に影響を及ぼしたという。さらにロッキード社は日本政府当局者に贈賄した」という内容。

言うまでもなくロッキード事件の幕開けである。後に元首相の逮捕にまで進展し、わが国最大の疑獄事件となった。

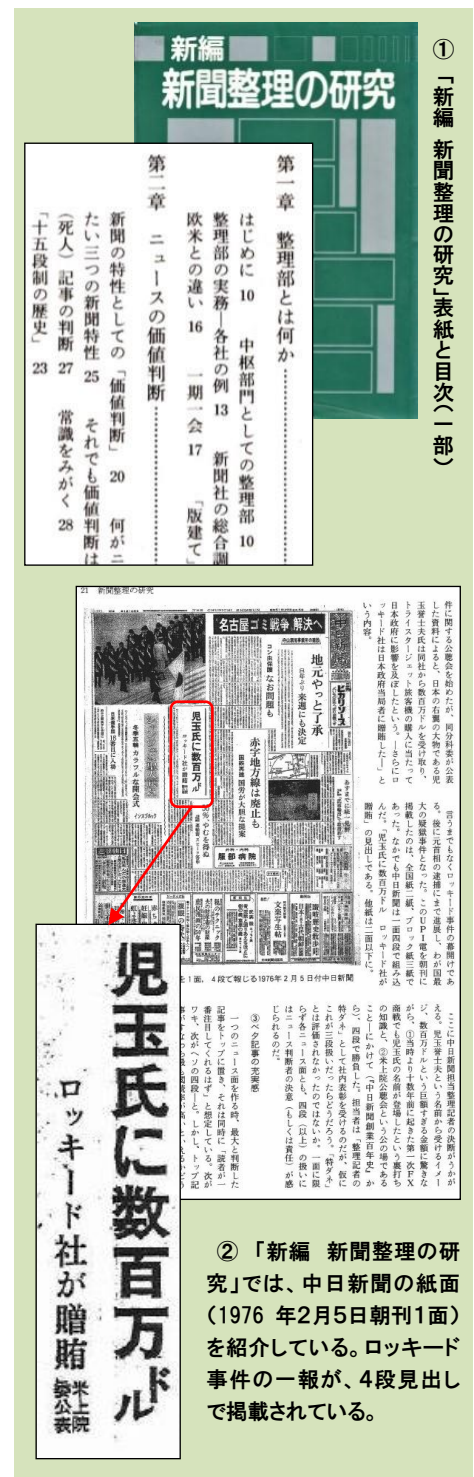
これは、日本新聞協会から発刊された書籍「新編 新聞整理の研究」(94年)＝右図①＝からの引用です。価値判断や見出し、レイアウトなど、紙面編集を総合的に論じた「整理のバイブル」的な一冊です。

■ 「1面4段見出し」という決断

同書によると、このUPI電を朝刊に突っ込んだのは、全国紙2紙とブロック紙3紙だった由。このうち中日新聞は1面に「児玉氏に数百万ドル ロッキード社が贈賄」という4段見出しで組み込みました＝右図②＝。他紙は、2面など中面の掲載でした。再び同書を引きます。

ここに中日新聞担当整理記者の決断がうかがえる。児玉誉士夫という名前から受けるイメージ、数百万ドルという巨額すぎる金額に驚きながら、①当時より十数年前に起きた第1次FX商戦でも児玉氏の名前が登場したという裏打ちの知識と、②米上院公聴会という公の場であること——にかけ(『中日新聞創業百年史』から)4段で勝負した。

記事は内容が全て、掲載面は無関係——というわけではありません。新聞の1面には特別の重みがあります。「大ニュースになる」との確信があるからこそ、担当者は1面に4段という大見出しで掲載しました。担当者は「整理記者の特ダネ」として社内表彰を受けたそうです。



■ 「5段見出しでねじ込んだ」けれど……

では、他紙はどうだったのでしょうか。ここでは朝日を見ましょう。
『朝日新聞社史 昭和戦後編』(95年)に記載がありました。

東京。2月5日午前1時半。編集局の一日が終わりに近づいていた。外報部では、夜勤のデスク1人と記者3人が、緊張を解こうとしていた。(中略)電話が鳴った。朝刊最終版の締め切り直前だった。

「ロッキードの贈賄工作で、児玉誉士夫の名前が出たんだ。20行ほど送る。突っ込んでくれ」。ワシントンの声はせきこんでいた。このとき最終版の紙面はすでにあらかた組み上がっていた。しかし、整理部のデスクは事の大きさを的確にうけ止めた。(中略)強引に2面中央の記事をはずし、5段見出しでねじ込んだ。

■ その気になれば1面トップだった

こうしてできた朝日の2面=右図③。確かに5段見出しは目立ちます。でも「強引に2面中央の記事をはずし」紙面の作りかえをするなら、どうして1面に入れなかったのでしょうか。

当日の1面=右図④=を見ると、改造は容易に思えます。一番簡単なのは、左肩の「『武器』で統一見解」の記事を削り、見出しも小さくすること。その跡地にロッキードを4段見出しで突っ込めます。もう少し手をかけるなら、見出しが縦横4本もある「厚生年金マンモス化」をもっと小ぶりの扱いにすれば、ロッキードをトップで扱えました。そこまでしたら、文句なしの「整理の特ダネ」です。

実際、翌日夕刊ではロッキードを1面トップで扱っていました=右図⑤。朝刊最終版は、限られた時間で判断しきれなかったのでしょうか。

■ 夕刊が初報の毎日新聞

「他紙はいい、毎日新聞はどうだ」と尋ねられると、赤面します。朝刊に掲載できず、翌日夕刊がロッキードの初報となりました。

本社OB・立石勝規(かつのり)氏の著書「闇に消えたダイヤモンド」=右欄参照=に、当夜の編集局の姿が描かれています。問題のUPI電は本社も受信していたけれど、外信部が見過ごし、社会部が気づいたのは、最終版の印刷が始まった午前1時40分過ぎだったそうです。

社会部デスクの原田三朗氏(元毎日新聞論説委員)は会社に泊まりましたが、翌朝の他紙を見てホッとします。朝日は2面、読売には載っていないからです。同書から、氏の正直な気持ちを引用します。

朝日新聞の担当デスクはニュース価値の判断に迷って、2面に回したのであろうか。原田は内心、「助かった」とホッとしている。これだけの事件を出足から勝手に他社に抜かれたら、目も当てられない。こうしてロッキード事件は、勃発の朝を迎えた。

では、もし原稿が闇に合っていたら、自分ならどんな紙面を作ったでしょう。迷わずトップにできたのか。元編集者として自問します。



(上) ③ 76年2月5日 朝日朝刊2面
(下) ④ 同1面



(上) ⑤ 76年2月5日 朝日夕刊1面



著者の立石氏は、1943年青森県生まれ。毎日新聞東京社会部副部長、編集委員などを歴任。著書に「東京国税局査察部」(岩波新書)など。